

## R e : コード

re-cord

『re (戻す) cord (心 (こ))』

〔他動〕【rikōrd】記録する、録音する。

(三省堂 ウィズダム英和辞典 第四版)

## (一)

鈍い地響きと共に、視界全体が不意に暗転した。

一瞬、思考がフリーズする。

うわ、停電か、と脳が認識した次の一秒にはもう非常灯がパッと点いて、コントロールルーム全体を赤い光で照らし出す。目の前の大型ディスプレイは停電なんてどこ吹く風

で、皓々と光り続けている。浮遊しかけた意識をそこに戻し、目の焦点を合わせる。うん、大丈夫だ。作業内容は消えていない。直前まで僕が集中して打ち込んでいたプログラムコードは、変わらずそこに在る。書きかけの変数名の先端で、カーソルが点滅している。念のためCtrl・Sでセーブしてから、眼鏡を外してかたわらに置く。一気に世界が低画質になり、緊張がほどける。目頭を指で軽く押さえ、ふう、と大きく息を吐く。

この端末は、量子記憶装置<sup>アルタラ</sup>の保守用コンソールのひとつだ。二〇二〇年にサービスインしてから早七年、僕が参画するクロニクル京都事業の提供する様々な情報サービスは、もはや京都市民にとって不可欠なインフラとなっている。京都市はいまや、神奈川出身の僕が若干引くくらいの先進的情報特区だ。その中核であるこのアルタラセンターにも、自家発電装置とUPSはもちろん備えられている。アルタラ本体と主要な保守用機材は、外部電力供給が絶たれても七十二時間は単独で稼働できる。だから、慌てる必要はない。

とはいえ、こりゃ面倒なことになったな、と気が滅入る。よりによって僕がシフトの日、に、停電が起くことは。

アルタラの保守運用も僕らセンター職員の大事な職務だ。三交代制のシフトが月に一、二回程度回ってくる。といっても、稼働七年目となつてはすっかり惰性のルーチンワーク

だ。平常時であれば、基本的には異常の有無をただ見守り続けるだけで充分だし、多少のエラーがあってもマニュアルに沿って対処すれば済む。

ただ、こういう大きめのインシデントが起こると、やることが一気に増える。ババを引いた、というやつだ。

しかも。

今日に限ってはそれだけでは済まない。悪条件が、なんと三つも重なっている。ババのトリプルコンボだ。

ひとつ。土曜日であること。

ふたつ。夜の十一時過ぎであること。

みつ。宇治川<sup>うじがわ</sup>花火大会の開催日であること。

他の職員たちは夕方から連れ立って花火大会に出払ってしまった。つまり、増援はほぼ期待できない。花火自体はもう終わっているだろうが、<sup>せんこ</sup>千古先生も<sup>シュウ</sup>徐先輩も同僚たちも、すっかりいい気分で酔っ払っている頃合いだろう。

まったく、誰だよ、こんな日にシフト入れたの。

——僕だ、とすかさずセルフツツコミを入れてしまう。

誰もが当番を避けたがるこんな日にわざわざシフトを買って出たのは、他ならぬこの僕自身なのだ。

だって、宇治川花火大会なんて。

ずっと記憶の底に押し込めてきた、人生の黒歴史なのだから。

二〇二四年、三年前の宇治川花火大会。そこから逃げ続けた結果が、このザマだ。

「ああ、くそ。最悪だ」

思わず口をついて出る。



「あのさ、ちょっと変な話していいかな。……私さ、来週から、実家戻ることになったっちゃって」

一瞬、思考がフリーズした。

祭りの喧噪が、急に遠くなった。

えっ、と間拔けな声を発した僕の隣で、宇治川にたゆたう浮舟の灯りを眺めながら、彼女は続けた。「母親、ちょっと倒れてさ」

僕の顔をちらりと見た彼女は慌てて付け加える。

「あ、違うの、全然深刻なやつとかじゃないから。そんな顔しないで。でも、お母さん、一人暮らしだから……。どうせ今の仕事、フルリモートだから京都にいらなくてもできちゃうしさ……」

話が頭に入ってこない。こんなタイミングで、彼女のターコイズブルーの浴衣の柄とピアスがお揃いであることに気づく。何をやってるんだろう、僕は。

華奢な手が巾着バッグの紐を固く握り締めている。桜の花を象った水引のストラップがふるふると小刻みに揺れている。確か、東寺とうじで買ったやつだ。

夜風が彼女の後れ毛を撫でた。火薬の匂いの奥に、かすかにいつものラベンダー系の香りがした。

「……だからさ、あのね、めちゃくちゃ急なんだけど、えっと」

彼女は少し言い淀んでから、僕の目をじっと見据えた。端正な顔立ちが、ほんのわずかに歪んだ。

続く言葉の予想はとつくにつけていた。やめろ。言うな。心の中でそう叫ぶが、言葉が

出ない。

「バンド、辞めることにしたんだ」

ごめんね、と言う彼女の小さな声に重なるように、ひゅう、と甲高い音が鋭く上空を切り裂いた。彼女の背後の夜空を、ひととき長い光の尾がどこまでも昇っていく。束の間の静寂が続いて、本日最大の牡丹が天高く花開く。彼女の髪留めと白い首筋が照らし出される。わずかに遅れて届いた重低音が大気を震わせ、僕の全身をノックアウトする。

彼女が何を言っているのか理解できなかった。やつとのことで絞り出した「そっか……」というひどすぎる返しは、スターマインの爆音にたちまちかき消された。鮮やかな光彩が絶え間なく空を焦がし、無数の破裂音が山々にこだまする。僕は、ただ茫然と立ちすくむほかなかった。

二〇二四年七月六日、土曜日。

第四回宇治川花火大会は、今まさにクライマックスを迎えようとしていた。

学生時代から惰性で続けていたコピーバンドに脱退者が出て、代わりにバンマスが連れてきたギターボーカルが、彼女だった。

最初に惹かれたのはその歌声だった。帰りの方向が同じで、笑いのツボが同じで、映画

の趣味が同じで、すごく感性が近いなと思える人だった。一方で僕とはまるで違ってひたむきで、我慢強くて、いつも自分より他人を優先してしまう人だった。

気にならなかったといえど嘘になる。だけど僕はそれ以上の行動に出なかった。バンド内恋愛禁止という暗黙の了解があったし、才色兼備で人望も厚い彼女に自分みたいなヘタレ野郎が釣り合うとはとても思えなかった。何より、自分の利己的で卑劣な本性がバレて幻滅されるのだけは避けたかった。彼女にとっても僕はただのバンド仲間でしかなかった。それでいいと思っていた。

ただ、僕にはささやかな夢があった。うちのバンドで初めてのオリジナル曲という挑戦だ。いつかやりたいねとは彼女とも言い合っていたが、キーボード担当で多少の心得のある僕は独断で作業を開始していた。夏の間に簡単なバンドスコアとデモ音源を作ってから、みんなに見せて練り上げていくつもりだった。

そこに僕はひそかに自分のエゴを詰め込んだ。

完全に彼女への“当て書き”だった。彼女の声質とテクニックを熟慮しつつ、彼女の奥ゆかしさと、内に秘めた芯の強さと、ステージ上でだけ見せる情熱を思い浮かべながら、夜な夜なDAWと格闘した。コードを打ち込み、リズムを刻み、フレーズを練った。あか

らさまにならないように、細心の注意を払いながら。

譜面の推敲は紙と鉛筆でやる派なので、プリントアウトは常に持ち歩いていた。だからあの時も、リュックの中から出すことはできたはずだ。

作りかけではあっても、彼女に見せることはできたはずだ。

だが僕は、それをしなかった。

まだ完成してないし。Bメロもまだ納得行っていないし。ていうか当て書きなんて言ったらドン引きされそうだし。

……いや、彼女がバンドを抜けてしまうのなら。

もうこの曲には存在意義がないわけだし。

急に正気を取り戻した。すべてがものすごく恥ずかしくなった。

危なかった。僕は浮かれすぎていた。浴衣姿と祭りの熱気に、いい歳して舞い上がっていた。誘われたのが昨日って時点で気づくべきだった。急に実家帰りが決まって、最後に京都の夏らしい体験をしておきたくなっただろう。都合がつく暇人が僕だけだったってことじゃん。勘違いするな。そんなわけないんだよ。



何が当て書きだよ。恥を知れよ。

僕はひたすら混乱していた。混乱しながら、そんなことを考えた。

心にブレーキをかけた。

そこから先の記憶は曖昧だ。どんな会話を交わしたのかまるで覚えていない。思い出せるのはただ、長い沈黙と、気まずさを振り払うような彼女のテンション、そして雑踏の中に消えていくターコイズブルーの背中に映える白い帯だけだ。それが、彼女を見た最後の記憶だった。

数日後、Wizのグループに短い挨拶を投稿したのを最後に、彼女は僕らの前から完全に姿を消した。あと一、二回は練習に出てくるだろうと思っていた僕は狼狽したが、後の祭りだった。彼女個人とのWizは未読スルーになって、さすがの僕もそれ以上の連絡は自重した。彼女の脱退はバンドにとっても痛手で、新しいメンバーを入れたものうまく行かず、程なくしてバンド自体も解散した。

後悔は、数週間後になっていきなり訪れた。地下鉄烏丸線からすまの改札を出たところに、彼女が好きだった化粧品ブランドの店舗がある。何気なく前を通った瞬間、ふわりとラベン

ダー系の香りがした。

何の前触れもなく涙がこみ上げてきた。

なぜ、あの時、譜面を彼女に渡さなかったんだろう。

もちろん彼女の決断を覆すことはできない。観念して受け入れるほかない。バンドの解散も必然だった。たとえ譜面を見せたところで、僕らがそれを演奏する機会はいずれなかっただろう。

ただの自己満足なのはわかっている。恥ずかしさは今も変わらない。彼女だって譜面を渡されても困惑したに違いない。

それでもあの曲には、僕らの二年間がすべて詰まっていた。万の言葉を尽くしても足りない、彼女に対する思いが込められていた。

感謝と、敬意と、ただ幸せを願う気持ちと。

大切なバンド仲間として、最後にそのくらいは伝えておくべきだった。

あれは、あの状況で僕が渡すことができる、唯一の餞別だった。それなのに。

僕は彼女に餞別どころか、さよならすらまともに言えなかった。

人生に“もし”はない。過去を書き換えることはできない。

たとえ人生を何周したって、きっと僕は同じ過ちを繰り返すのだろう。僕はその程度の人間だ。あれから三年も経つが、何の成長もしていない。こうやって嫌なことに蓋をして、思い出さないようにして、一生、逃げ続けて生きていくのだろう。

忘れろ。考えるな。



自己嫌悪を追い払うように首を振って眼鏡をかける。視界の情報量が一気に膨れ上がって、くだらない感傷を押し流す。今はまだシフト中だ。明瞭になった意識で、今やるべきことを再認識する。

停電自体は、アルタラセンターでは別に珍しいことではない。悪天候による瞬低は時々あるし、年に一度の法定設備点検時には自家発電とUPSのお世話になる。だから、まあ、まずはマニュアル通りの作業となる。

壁面の巨大スクリーンに視線を走らせ、表示を一つ一つチェックしていく。特に異状は見当たらない。絶対零度もナノKのオーダーで維持されている。一箇所だけ、内部電源供給を示すINTERNALという赤表示が出ている。でも、それも想定内だ。

よし、アルタラには異状なし。

まずは一安心だ。当面は復電を待つことになる。停電発生からここまでは……およそ三分か。まだ復電しないということはそこそこ大規模な停電なのかもしれない。珍しいな。

さっきの休憩で外の空気を吸いに出たとき、遠雷が聞こえたのを思い出す。西の空に垂れ込めた雲の底がぴかり、ぴかりと光っていた。湿度が肌にまとわりつき、雨の前の特有の匂いが鼻について、これは降るな、と五感でわかった。こういうのを丹波太郎<sup>たんぱたろう</sup>、このだと、京都<sup>きょうと</sup>に来て初めて知った。この手の京都豆知識を披露する彼女は決まってドヤ顔をしていた。なんだよ。自分も京都出身じゃないくせに。

——いや、そんなことはどうでもいいだろ。そう、雷だ。この停電もきつと落雷のせいだろう。市内の他の区域も停電しているのだろうか？ 雨の様子はどうか？

スマホを取り出し、<sup>ブルーラウエザー</sup>天気アプリを立ち上げようとして、手が止まる。

“圏外”の文字が目に入る。

おいおい、携帯まで障害かよ？ 基地局にでも落雷したのだろうか。機内モードをオン

オフしても状況は変わらない。停電プラス通信障害とは。……かなりひどいな。WiFiもPCの有線ネットワークも死んでいる。どこかの部屋のルーターが落ちてるんだろう。なんでUPSにつなげてないんだよ。

しょうがない。あいつを叩き起こすか。

あいつというのは今日のもう一人の当番、増<sup>ますぶち</sup>渌だ。たぶん上のラボで、ドローンでもいいってるか寝てるかしてるんだろう。マイペースな奴だが、周囲からは一目置かれていいる。今だって別に無断でサボってるわけじゃない。今日はやることも少ないし、建物内にさえいてくれればオンコール対応でいいさ、と彼に言ったのは僕のほうだ。ラボから降りてこないところを見ると、停電に気づかないままソファで寝てるに違いない。電話もチャットもWizも使えないなら、直接行くしかない。

コントロールルームの自動ドアは、手動で開けることができた。通路に出る。空調が停止しているせいか、いやに蒸し暑い。エレベータも止まっているようだ。しょうがなく、非常灯に照らされた階段をひたすら上がっていく。ああ、最悪だな、もう。まったく、宇治川花火大会の日ってのは、いつもろくなことが起こらない。

階段を上がりきって、地下二階のがらんとしたフロアに出る。一角にある共用ラボの扉を手でこじ開け、足を踏み入れる。いつもガラス越しに見学者の好奇の視線に晒されて、内々で“動物園”なんて呼ばれているあの部屋だ。研究者というけつたいな生き物の動態展示は、あれはあれで結構な人気があるらしい。うちの群れのリーダーはそれをよく心得ていて、いつもファンサを欠かさない。おかげで僕らは心労が絶えない。

いつだったか、見学ツアーの気の毒な男子高校生がそれを見せられて、幻滅と軽蔑を足して二で割ったような顔をしていたのが忘れられない。彼の将来の進路を狭めていないことを祈るしかない。

幸い、というべきか、土曜の夜の動物園には当然ながら見学者はいない。

そして、群れの若きホープ、増淵の姿も見えない。ぐるりと見渡してみても、赤い非常灯に照らされた部屋はもぬけの殻だ。自家発につながった数台の端末だけが白い光を発している。

「おーい」

スマホのライトをつけて、大きく振ってみる。

「増淵ー？　いないのか？」

僕の声がうつろに響く。ソファには誰も寝ていなかった。机の上には、分解中のドロ―

ンと電子部品が転がっている。ハンダごてがコンセントに刺しっぱなしだ。オートパワーオフなんてついてない旧式のタイプだから、きつと先端は熱せられたままだろう。そういえば、ハンダの焼けた匂いがかすかに鼻をつく。直前まで作業をしていたのかもしれない。嗅覚が封印していた記憶を呼び覚ます。ハンダ付けを覚えたのもバンドだった。あの頃の僕は、刺しっぱなしにして彼女に怒られる側だった。

——ブルースト効果を恨みながら、大きく溜め息をつく。

「まったく、席を外すなら抜けよな。……おい」

コンセントからプラグを抜いてから再度、室内を念入りに見回してみる。トイレだろうか。スマホは相変わらず圏外だ。これのどこがオンコールなのか。

もしや、どこかの部屋に閉じ込められているのだろうか。案外、自動ドアが内側からは手で開けられるのを知らないのかもしれないな。

どちらにしても、と僕は考える。なにしろ土曜の深夜だ。他部署や府庁エリアまで含めても、この建物に僕と増淵以外の職員がいる可能性はかなり低い。だが一階にある警備員の詰所なら、確実に人がいるはずだ。協力を仰いだほうがよいかもしれない。部屋の物理鍵も持っているだろうし、こういう時の対処法も把握していそうだ。よし、ついでに外の状態も確認してこよう。最悪でも、隣の府警の建物には誰かしらいるだろう。

“動物園”を出て、見学者コースに沿う形で一階に向かう。アルタラの見学スペースを足早に通り抜けつつ、巨大な球体を横目で一瞥する。見たところは何の異状もない。内部も正しく機能していることは、ついさっきモニタで確認したばかりだ。アルタラは、何も変わらず涼しい顔で、そこに在り続けている。

だけど。

照明がいつもと違うせいだろうか。その白い巨大な球体は何だかやたらと禍々しく見えて、僕は思わず目を逸らして先を急いだ。

## (二)

見学者スペースの大階段を一階までようやくと昇り切ると、顔から汗が滴り落ちた。空調が切れて淀んだ空気が蒸し暑さを助長している。一階から上は府庁の管轄なので、あまり馴染みがない。ええと、警備員室はたしか、給湯室の隣だったかな。レトロな回廊をぐるりと回ってそちらに向かう。



ドアは開いている。だが、嫌な予感がする。人の気配がしない。部屋を覗き込んで、声をかける。

「あのう、すいませーん」

やっぱり、誰もいない。監視カメラの映像がずらりと並んだディスプレイが、静かに光っているだけだ。

参ったな、こりゃ。こういう時にスマホが使えないのは地味につらい。巡回警備にでも行っているのかもしれない。だとしたらここで帰りを待つべきか？ あるいは、正門脇の保安室に――

視界の端を、スツと何かが横切った。

反射的にそちらに顔を向ける。アーチ型の白い柱が、暗い空間を額縁のように切り抜いている。奥から吹いてくる生温かい風に、その先がもう建物の外であることに気づく。中庭への降り口だ。アーチの先には、中央に植えられた枝垂れ桜のシルエットが、夜の闇の中にくろぐるとそびえ立っている。

その幹の横に、人が立っているのが見えた。

ここから十メートルは離れているだろうか。濃紺の上下制服に身を包んだ人影が、こちらに背中を向けていた。かなり背が高い。

——警備員だ！

見るなりそう直感した。

こんなところにいたのか。ああ。良かった。

その姿は本当に頼もしく感じられた。白手袋に黒い安全靴、建物内部からの光を受けてくつきりと浮かび上がる背中の反射ベストは、セキュリティを司る者のたしかな象徴だった。

ようやく生きた人間に会えて、僕は心から安堵した。馬鹿馬鹿しい想像だとはわかっているけど、なんだかこの世界から僕以外の人間がすべて消え去ってしまったような気すらしていたからだ。それくらい、館内には人の気配が感じられなかった。まあ、土曜の深夜なんてそんなもんか。

これで何とかなるだろう。まずは停電や通信障害の状況を聞いて、一緒に増測を探してもらおう。したらインシデントレポートも書かないと。面倒だなあ。そうだ、この停電でトイレが使えるのか聞かなければ。安心したら急に尿意を催してきた。もしも使えなかったら悲惨きわまりない。

中庭への降り口に足を踏み出す。雨は小降りになっているようだ。

「……あのう！」

警備員の背中に向けて、声を張り上げたその時だった。

突如、枝垂れ桜から、一陣の桜吹雪が昏い夜空へと舞い上がった。

ように見えた。

目をしばたいたってから、もう一度大きく見開く。眼前の光景を理解しようとする。

桜吹雪はカラフルにきらめきながら嵐のように舞い踊り、あつという間に僕の視界を音もなく覆い尽くす。

……いや、違う。これは。

桜吹雪、じゃない。

よく見ると警備員が、手袋を木の幹に押しつけている。手袋に触れられた部分が、たちまち格子のような色とりどりの小さなブロックに変化する。ブロックはそのまま光りながら空中に拡散し、夜の闇に溶けていく。消える。消滅する。沸騰する泡のように、桜の木が分解されて“無”に還っていく。桜吹雪のように見えたのは、この世界の物質がその実

体を失う瞬間の、最後の輝きなのだった。

その男は、警備員ではなかった。

異様に長く垂れ下がった腕。あるべき所がない首。人ならざる動き。

「ひ」

僕は声にならない声を上げる。全身が総毛立つのを感じる。なんだ。なんだこいつは。人間じゃない。いや、この世の存在じゃない。見てはいけないものを見てしまったと直感でわかる。何を。何をやっているんだ。こいつは一体何を。

枝垂れ桜を構成していた最後の一片が極彩色にひとときわ明るく輝いて、それからはらりと虚空に消えた。

桜の木の最期を見届けた猫背が。ゆつくりと。

本当にゆつくりと、こちらを振り向く。

今すぐここから逃げ出したいのに。

僕はそこから目が離せない。

取り憑かれたかのように、僕はそれを凝視する。

そこには。

肩より低い異様な位置に配置された、白い狐の面があり。

その中央には。

巨大な卵黄のような、黄色く丸い一つ眼がこちらをぎよろりと睨み付けていた。

その瞳の奥には、何の意思もなかった。ただのプロセスだけがあった。

そして、そいつの胸部から数センチ前の空間に、うつすらと薄緑色の文字列が浮かび上がっているのを、僕は見逃さなかった。

## A L L T A L E      S Y S T E M

散々見飽きたロゴ。僕の仕事道具。

ようやく、僕はすべてを悟った。

狐の面の男の正体を。

この世界の在り方を。

そして。

僕とこの世界の運命を。

次の瞬間、本能的に、僕は脱兎のごとく逃げ出していた。

\* \* \*

旧本館一階の長い回廊を、全力で走りながら考える。考える。必死で考える。

この世界は。僕が今生きているこの世界は。おそらくアルタラ内の記録世界だ。僕はアルタラに記録された、ただのデータだ。

そんな馬鹿な、と思う。そんな荒唐無稽な話があるものか。けどもう一人の自分が、それに反論する。アルタラを日々扱い、その振る舞いを熟知しているからこそ、この仮説を支持する情況証拠はいくらでも思いついてしまう。

あの狐の面の男は、アルタラのシステムファイルだ。恐らく、自動修復システムの類だろう。内部ではまさかあんな見た目になるとは想像すらしてなかったが、まあ、そういう

ものなのだろう。

回廊の角を勢いよく曲がり、旧議場の脇のスペースに駆け込む。

小さな扉の隙間からそつと外界を窺う。カラフルなキューブが虚空に散っていくのがちらりと見えて、慌てて扉を閉めた。別の狐面の男が数体、かなり遠くをうろついているのも視認できた。狐面の男は複数いたのか、と戦慄するが、そもそも自動修復システムのプロセスはフォークでどんどん増える設計なのを思い出して、さらに頭を抱えなくなった。ここから外に逃げるのは危険だ。方針を変更して、地下二階のラボにひとまず撤退しよう

と決意する。

所詮、やつらから逃げられないことはわかってる。だけど、少しでも時間を稼ぎたい。頭を冷やして考えたい。

階段を一段飛ばしで駆け降りつつ、さらに頭を回転させる。

この世界がデータであることについては、僕は別にそれほど驚いていない。アルタラが現実の完全な複写であるなら、僕らは両者を区別できない。データだろうと実体だろうと、

本質的には何も変わらないし、何も困らない。

問題は、不可視のはずの狐面の男達が、僕から丸見えなことだ。あれはセーフモード特有の挙動な気がする。普通の状態じゃない。ユーザ空間から隠蔽されているはずのシステムファイルが見えていること自体、図らずもここが記録世界であることを示す識別子<sup>トリーテム</sup>となってしまうている。

しかも、やつらは中庭の枝垂れ桜を消した。

誤りを訂正したのではない。あるべきものを、消去した。

あるものを、ないようにする。

自動修復システムがそんなイレギュラーな動作をするケースを、僕はただ一つしか知らない。

——この世界は、リカバリされようとしている。

なぜそう断言できるかって？　だって、そのへんをコーディングしたのは僕だからだ。要件定義は完全に千古先生や徐先輩の成果だけど、ソースコードレベルの実装は僕の頭



に焼き付いている。

\* \* \*

やつのことでガラス張りのラボの前まで戻ってくる。躊躇なく中に飛び込む。ドアを閉め、ロックをかけ、その前に机でバリケードを作る。意味はない。ただの気休めだ。ゾンビ映画のショッピングモールで誰もがやるやつだ。

煌々と白く輝くディスプレイの群れに、少しほっとする。ここは僕のホームだ。建物全体を満たしているあの赤い非常灯の光は、どこか精神衛生上良くない気がする。

まだ心臓がバクバクしている。汗だくの額を二の腕で拭う。全力疾走したせいもあるが、室内自体もかなり蒸し暑い。ふらふらとソファに向かうと、部屋の隅の実験用フリーザーが目に入った。少しでも涼を求めたい本能と、世界がリカバリされることへの諦観から、僕はためらうことなくフリーザーの扉を開けた。

電源は切れていたが中はまだひんやりとしている。流れ出す冷氣にしばらく顔を晒すと、少し生き返った気分になった。高価な試薬や中身不明のアンブルをかきわけてみる。深い地層からなんと、霜だらけの棒アイスが数本発掘された。徐先輩の目を奇跡的にやり過ご

して、数年は熟成されたものと思われる。誰だ、アイスなんか入れたの。だが今となっては天の配剤だ。

ソファにどっかりと腰を下ろして、解けかけのアイス（バニラ）をかじる。ただし、ガラス窓の向こうへの警戒は怠らない。

「ああ、くそ」

本日何度目かの悪態をつく。

うんと乱暴にいえばリカバリとは、アルタラから記録を取り出してハードを“ゆらぎ”の状態に戻し、データを修復して再びアルタラへと戻す一連の作業の総称だ。もつとも僕らは、千古先生も含めて、実際にリカバリを本番環境で体験したことはない。いわば最終手段、万事休すとなった際の最後の命綱だし、復旧には年単位の時間がかかるから、そう簡単に実行されても困るのだ。

その第一フェーズは、領域ごとの記録連結を剥離して解放することから始まる。

目の前の机の上に、分解されたドローンが転がっている。増測の作業の痕跡だ。

恐らく増測は——逃げたのでも閉じ込められているのでもない。システムとの連結を解除されているのだろう。

「……最悪だな」

思わず独りごちる。記録の連結が絶たれると、相互干渉ができなくなる。他人から不可知の状態になるのだ。

その仕様の物理的な意味を、僕は今の今まで考えたことすらなかった。

もしかすると増測はこの建物の中を孤独にうろうろしているのかもしれない。だけど僕には感知しようがない。増測だけじゃない。恐らく僕自身も、本来の警備員も、そして京都市民達もきつと、互いに見えない状態になっているんじゃないだろうか。停電と通信障害に加え、周囲の人間が忽然と消えて、世界に一人ぼっちで置き去りにされる……控えめに言っても地獄だが、今はこれ以上、考えないようにしよう。僕にはどうしようもない。

二本目のアイス（ストロベリー）の包装に手をかける。記録の剥離の次は、何が起こるんだっけ。

「記録連結を剥離したら、ふるい<sup>sifter</sup>で均す。最後は全領域解放だ」

かつてリカバリ手順の読み合わせで聞いた、千古先生の声が脳裏に再生される。連結が解除された記録を“ふるい”と呼ばれるアルゴリズムで均して、正規化された量子記録ビットの形に還元し、外部に取り出せる状態にするのがこの第二フェーズになる。後戻り<sup>ロールバック</sup>

できない処理だから、確かシステム上は、最終確認のダイアログを出す設計だったように思う。

狐面の男が枝垂れ桜の木をカラフルなキューブに還元していたのは、データを均す操作に相当するのだろう。一向に復旧しない停電も通信障害も、送電網や基地局がやられてしまったせいかもしれない、と考えて背筋が凍る。誰だって真っ暗闇でわけもわからず死にたくはない。ここの自家発電のありがたさがこれほど身に沁みたことはない。

三本目のアイス（チョコ）は、もうかなり解けていて棒がぐらぐらしている。大口でかぶりつきながら、思考を続ける。

データを均したあとは、記録を外部に取り出す作業になる。この世界でそれがどのように見えるのか、僕には想像もつかない。

ただし、確実に言えることがひとつある。

量子データであるアルタラの記録を取り出すには精密な観測が必要になる。だが観測の精度を上げるほど、元のデータに影響を与えてしまう。元のデータは必ず変質し、失われる。

つまり、リカバリの過程で、この世界のあらゆるデータは消えるのだ。

京都の街が消え、自然が消え、人々が消える。もちろん僕も消える。

僕は、死ぬのだ。

まあ、しょうがない、と思う。

この部屋に狐面の男達が踏み込んでくるのも時間の問題だろうが、悪あがきしたところで、ただのデータでしかない僕には抗いようがない。電気が来ている部屋でアイスを食べながら死ぬるなら、相当幸せな部類だろう。そう考えたら、そう悪い人生でもなかったのかもしれない。

せめて、最期が苦しくないことを祈るしかない。殺<sup>や</sup>るならひと思いに殺<sup>や</sup>ってくれ。はて、そのところ、どうコーディングしたつけ？ ……ダメだ。コードの中身は思い出せても、物理的にどうなるのか、まるでわからない。

僕の家族や親戚も、そして彼女も、京都にいらなくて本当に良かったと思う。アルタラの記録範囲は京都一円の事象だけだからだ。京都に滞在している間だけ、彼らは記録される。そういうものだ。

この世界のどこにも、彼らは存在しない。だけど、だからこそ、この地獄絵図を見ずに

すむ。せめてもの救いだ。

いや。待てよ。

問題は、その先だ。

僕は死ぬ。世界は消える。

そして。

再構築される。

リカバリされた二周目のアルタラに、再びデータが戻される。クロニクル京都事業が開始された二〇二〇年以降の記録が、もう一度アクティベートされる。

その世界で僕は、人生を繰り返し返す。

僕は、再び——同じ過ちを犯すのだ。

二周目の世界で、宇治川の花火をバックに、彼女はあの台詞を口にするのだろう。

それを聞いた二周目の僕はきつと——いや、一〇〇パーセント確実に、同じ轍を踏む。

くだらないプライドと不可逆変化に対する躊躇に苛まれて、またもや僕は何もしない。あの曲を渡せないまま、きつと彼女から手を離してしまふ。

記録がそうなっているからだ。

現実世界でしくじったクソみたいな自分を僕は恨む。たとえ僕が人生を何周しようと、ただの記録である僕らはその呪縛から逃れることはできない。世界がリカバリされるたびに、あらゆる事物は記録を忠実になぞろうとする。この世は決定論的で、すべての事象の運命は遠い未来まで、すでに決まっている。

あの黒歴史はそっくりそのまま繰り返される。そのたびに僕は深い後悔と自己嫌悪に襲われ、周囲の人間を逆恨みし、自分の性格と境遇を呪い、親の育て方や出身校にまで根拠のないヘイトを向ける。そんな目を背けたくなるような愚行すら、寸分の狂いもなく再現される。

いや、宇治川花火大会だけじゃない。

この七年間のすべての失敗、すべての後悔が永遠にループする。

消し去りたいあらゆる過ちが、リカバリのたびに何度でも復活する。そして毎回、暗闇

と孤独の中で、僕はすべてを呪いながらじわじわと苦しんで死ぬのだ。

なんという無間地獄だろう。

悔しい。

いくらなんでも、悔しすぎる。

「くそっ」

手に力を込める。アイスの棒が音を立てて折れる。

誰だよ、リカバリをこんな設計にしたの。

——その問いはブーメランとなって僕の脳天に突き刺さる。

僕だ。

いや、正確に言えば基本概念や基盤技術は千古先生や徐先輩の成果だ。だけど、カーネ  
ル部分の実装は僕だ。

自業自得。因果応報。身から出た錆。自分の蒔いた種。お前が始めた物語。



……あれ。

僕が設計したロジック。僕が書いたコード。  
その意味するところを僕は反芻する。

点と線が繋がる。

脳内に電撃が走る。

自問する。じっくり考えている時間はない。勢いよく立ち上がる。ソファのスプリングが悲鳴を上げる。

なにか、書くもの。

素早く見回すと、壁に貼られた研究成果のA0ポスターが視界をかすめる。引っ剥がすと、四隅のマグネットが勢いよく弾け飛ぶ。裏側の白い面を上にして床の上に広げ、模造紙代わりにする。

巨大な即席ワークスペースのできあがりだ。

ペン立てから油性ペンを引っ掴む。広げた紙の前に膝をつく。

まるで大きな画仙紙に揮毫<sup>きごう</sup>する書家みたいに、握りしめた油性ペンを大きく振りかざして。

まっさらな平面に、ひとり僕は対峙する。

### (三)

丸めたポスターを抱えて、正門から釜座<sup>かまんざどおり</sup>通に飛び出す。

雨は激しさを増している。広い街路には誰もいない。幸い、狐面の男達も見当たらない。ただ異様な空気だけが渦巻いている。どこか遠くから、くぐもったサイレンのような音が風に乗って聞こえてくる。

真夜中なのに周囲が灰明るい。見上げると空一面を、禍々しい赤いオーロラが覆い尽くしている。その一角、天頂付近に、ぽっかりと真っ黒な穴が空いている。街のあちこちから無数の瓦礫が浮かび上がり、色とりどりのブロックに還元されながら穴に吸い込まれて

いくのが見える。想像以上の惨状に、思わず足がすくむ。

あの穴が何なのか、僕にはわかってしまう。

あれは、読み出しプロセスだ。

量子記録データをアルタラの外に取り出すための穴だ。

で、あるならば。

僕は穴をしっかりと見据えながら、小脇に抱えていたポスターを広げ、その裏側に書いた文字列を天にかざす。

空に両腕を突き出し、穴に紙を見せつけるようにしながら、あらん限りの声で叫ぶ。

「これを読め！」

あの穴が、アルタラの記録を読み出して外部に取り出しているのなら。

僕はそのプロセスに。

インジェクション攻撃を仕掛けることができる。

センター外部に対してはブルーラ製の堅牢なセキュリティを誇るアルタラシシステムも、内部には特段の対策はなされていない。

まして、データ内からの攻撃なんて、完全に想像の斜め上のはずだ。少なくとも、僕にとってはそうだった。

普段ならそんな出来の悪い冗談みたいなことは絶対に起こらない。

だけど、リカバリの時だけは——自動修復システムが監視を停止し、記録に沿わない事象が存在可能になり、クローズだった世界に——セキュリティホール穴が空いて外部とつながり、さらに全てに気づいた設計者が内部に居合わせたら——ちよつと考えれば、そこに内在する脆弱性なんていくらかでも思いつける。

サニタイズなしにある特定のコードを仕込んだ入力を注インジェクション入すれば、その読み出しプロセスはそれを愚直に実行してしまう。敵対的プロンプトと組み合わせ後段のセキュリティを突破してやれば、原理的にはシステム権限昇格やデータベースの改竄だってできてしまう。

これは単なるアルタラ上の記録の改竄とはわけが違う。

通常のアルタラ稼働時には、全事象の記録はメモリ上に展開されて動いている。仮にそれを改竄しようとしても、自動修復システム——狐面の男達によるメモリスクラブと量子誤り検出・訂正符号がただちにそれを修復してしまうはずだ。

だがインジェクション攻撃が書き換えるのは、メモリ上で稼働中の記録じゃない。リカバリの際に外部にダンプされて保存される、データベースの源泉そのものだ。改竄されたデータは、リカバリ後にアルタラにそのままロードされて再び動き出す。

世界が、源泉ごと書き換わるのだ。メモリ上の異状だけを監視している自動修復システムは、一切何も気づかない。

「さあ読め！ 読めよ！」

馬鹿みたいに連呼しながら、僕は空に渦巻くオーロラを睨み付ける。

頭上に広げたポスターを無数の雨粒が叩き付ける。水滴まみれの眼鏡越しの視界はぼやけ、目にも口も容赦なく雨が入り込む。ずぶ濡れの白い上着を翻して、僕は天に向かって宣言する。

ポスター裏に書かれているのは、設計者しか知り得ない量子記録の操作コード。アルタ

ラに堅<sup>ハードコーディング</sup>書<sup>ワンライナー</sup>された一行。

これは、世界の在り方に気づいた人間のささやかな抵抗だ。

現実のクソみたいな自分自身に対する怒りの叛逆だ。

もうすぐ世界も自分も、このまま消えてただのゆらぎに戻るのだろう。だけど、僕ならそこにわずかな痕跡を刻みつけることができる。

持てるすべてを込めたコードを全力で頭上に突きつけて、僕はひとつの賭けに出る。

まるで僕の宣言に呼応するかのようには、世界がぐらりと傾き始める。いきなりつんのめりそうになって、慌てて足を踏ん張る。釜座通が下り坂になる。重力がおかしい。三半規管が猛烈な違和感を訴えて酔いそうになる。

地面の傾斜は次第にきつくなっていく。前方に滑り落ちそうになって、慌ててガードレールにしがみつく。肘に鋭い痛みが走るが、気にしている余裕はない。

京都の街が、折り畳まれようとしている。

世界が歪んでいく。北山<sup>きたやま</sup>のシルエットが見えているはずの空間に、なぜか今出川<sup>いまだがわ</sup>あたりの碁盤の目がどこまでも広がっている。府庁の敷地がせり上がり、その向こうに御所<sup>ごしよ</sup>の黒い森や同志社<sup>どうししゃ</sup>の尖塔、整然と並んだ家並みの葺<sup>いぢか</sup>が覆い被さっていく。こんなシーンを昔、

何かの映画で観たような気がする。

空間がさらに曲率を増し、僕はガードレールにぶら下がる格好になる。振り落とされないように街路樹の蔭に腕を絡ませ、植え込みに片足を突っ込んで固定する。バキバキと小枝の折れる音がして、草と土の匂いが充満する。体のすぐ横を、病院前に停まっていた車が空に吸い込まれていく。いつの間にかポスターの紙もどこかに飛んで行ってしまったが、さっきので読み込まれただろうし、いずれ何もかもが穴に落ちるだろうから、まあ問題ないだろう。

京都のあらゆるものが浮かび上がり、分解されながら空の穴に吸い込まれていくのが見える。東寺の五重塔。きよみづ清水の舞台。京都タワー。嵐山あらしやまの竹林。蹴上けあげインクライン。梅小路うめこうじの市電カフェ。四条河原町しじょうかわらまちのマルイ。出町柳でまちやなぎの映画館。

どれも思い出の地だ。バンドの中で京都府外出身よそざんは彼女と僕だけで、他のメンバーは見向きもしないからという理由で、ベタな観光名所巡りによく引っ張り出されたものだった。

不安定な格好で真っ赤な空を見おろしながら、最期まで僕は自分勝手な奴だったな、とあらためて考える。

僕なら世界を書き換えられる。そう気づいて、油性ペンを振りかざした僕の脳裏に反射

的に浮かんだのは。

あの晩、雑踏に消えていく彼女の後ろ姿だった。

世界平和でもなければ、人々の幸せでもなく。

僕はただ、ちゃんと彼女に。

あの譜面を渡したいと思った。

どこまでも自己中でどこまでもわがままな僕は、いまわの際きわにこんな卑近なことしか思いつけない。

やり直したいことならもつと他にいくらでもあつただろうに。

なのに、なんで、こんな。

取るに足らないことを。

まるで脈なしの相手にただ自作の譜面を渡すだけなんていう、自己満足の塊でしかないことを。

まあ、世界平和なんてコーディングしようがないのはたしかだし、短時間で書けるコー



ドには限界がある。人間の脳は情報密度の極致であり、人の心を書き換えることは事実上不可能だ。だから僕や彼女の心を直接改竄するなんてのは、思い上がりも甚だしい。単純な物理状態の書き換えコードすら、この紙のサイズにはきつと書ききれない。アルタラ内の量子記録の内部表現を僕らは間接的にしか知り得ないからだ。

咄嗟に書ける低水準のネイティブコードを書くしかなかった。

それがデータの世界に対して、具体的にどう作用するのかはわからない。グリッチ的な都合よい改変を作れるわけではない。空気が水になったり光が音になったりしてもおかしくない。せいぜい局所的なレンダリングが少し変化するとか、レイトレーシングがちょっとバグるとか、そのくらいだろう。

だから。

正直、これで何かが変わるとは思っていない。マクロに見れば何も変わらないに等しい。仮に理想的な条件がすべて揃ったとしても、何かの“きっかけ”程度にしかならないだろう。あの無間地獄が本当に終わるのか。それは結局、リカバリ後の世界の自分次第だけど、期待はできない。やっぱり譜面は渡せませんでした、で終わるかもしれないし、僕の知っ

たことではない。

だけど、気づいてしまった以上、ダメ元でもやってみないと気が済まなかったただけだ。ただの詰んだエンジニアの、やけっぱちのわがままでしかない。

とことん馬鹿だな。僕はひとり苦笑する。

十メートルほど離れている病院の建物がいいよ、狐面の男達の群れによって解体され始めた。京都府庁の建物にも狐面の男がびっしりと取り付いていて、すでにかなりの部分が消え去っている。見渡す限り、末法の世もかくやという光景が広がっている。

リカバリするほどの障害を引き起こすって、一体何をやらかしたんだよ。

現実世界のどこのどいつなんだよ。

さすがに自分ではないと信じたいところだが、優秀な同僚達がこんなヘマをやらかすとも思えないし、人為ミスで壊れるほど可用性が低いシステムでもない。よほど変な実験でもしたのだろうか。……しかも本番環境で。誰にせよそんな馬鹿が未来のセンターにいるのかと思うと、なんだか情けない。

いや、自分の書いたリカバリプロセスもひどいだろう、とセルフツツコミが入る。あまりに乱暴すぎた、と壊れゆく世界を見ながら思う。もっと上<sup>グレースフル</sup>品にやるべきだ。要改善点を

軽く百個は思いついたので、主要なやつをさっきの紙の隅にクレマー気味に書き殴ってやった。これもどこまで読み込まれるかはかなり怪しいけど。いずれにせよ、もし「次」があるなら、もうちょつと穏やかにやってほしいものだ。

空いた手でなんとかスマホを取り出してみる。電池残量が一〇%を切っている。もうすぐただのターコイズブルーの文鎮と化すのだろうが、その前に世界が終わりそうだ。

片手でフォトライブラリを開く。三年前まで遡る。何も知らない頃に浮かれて撮った写真達がスクロールされていく。

一枚を開く。

圏外だから、もう低解像度でしか表示されない。リハの合間にこっそり撮った、ギターボーカルの横顔。演奏中、斜め後ろの定位置からいつも見ていたその構図が、僕にとっての彼女の原風景だった。

粗い画像がさらにぼやける。視界全体が滲み、鼻の奥が痛む。

せめて眼鏡の水滴を拭きたいが、この体勢ではどうしようもない。

何やってんだ僕は。馬鹿だ。本当に馬鹿だ。結局最後まで、未練がましく後悔し続ける

のかよ。

もう、どうとでもなれ。そろそろ腕と脚が限界だ。

手に込めていた力を緩める。指先がガードレールから離れ、システムの当たり判定の対象外となる。

意外にも落下の不快感はなかった。ゆっくりと僕の体は、空の高みの穴へ向かって落ちていった。

□

「バンド、辞めることにしたんだ」

ごめんね、と言う彼女の小さな声に重なるように、ひゅう、と甲高い音が鋭く上空を切り裂いた。彼女の背後の夜空を、ひととき長い光の尾がどこまでも昇っていく。束の間の静寂に続いて、本日最大の牡丹が天高く花開く。彼女の髪留めと白い首筋が照らし出される。わずかに遅れて届いた重低音が大気を震わせ、僕の全身をノックアウトする。

彼女が何を言っているのか理解できなかった。やっとのことで絞り出した「そっ

か……」というひどすぎる返しは、スターマインの爆音にたちまち消された。鮮やかな光彩が絶え間なく空を焦がし、無数の破裂音が山々にこだまする。僕は、ただ茫然と立ちすくむほかなかった。

二〇二四年七月六日、土曜日。

第四回宇治川花火大会は、今まさにクライマックスを迎えようとしていた。

突如、彼女の背後から、一陣の桜吹雪が昏い夜空へと舞い上がった。

ように見えた。

目をしばたいたから、もう一度大きく見開く。眼前の光景を理解しようとする。

桜吹雪はカラフルにきらめきながら嵐のように舞い踊り、あっという間に僕の視界を音もなく覆い尽くす。

……いや、違う。これは。

桜吹雪、じゃない。

よく見ると周囲の山が、橋が、川が、建物が——たちまち格子のような色とりどりの小さなブロックに変化する。ブロックはそのまま光りながら空中に拡散し、夜の闇に溶けて

いく。消える。消滅する。沸騰する泡のように、周囲のあらゆる物体が分解されて“無”に還っていく。

あれだけ道を埋め尽くしていた観客が、いつの間にかいなくなっている。彼女と僕だけが世界に立ち尽くしている。彼女の浴衣の裾にノイズが走り、表面にカラフルなブロックが浮かび上がる。彼女が消えようとしている、と気づいた次の瞬間、彼女の中着に付けられた桜のストラップが白く発光し、まるで偽の桜吹雪に対抗するかのよう<sup>ワイヤフレイム</sup>に水引の花びらを撒き散らし始める。世界の解体が気休め程度に減速するが、すぐにぶり返す。桜と花火とカラフルなブロックは渾然一体となりながら、RGBの花嵐となって僕らの周囲を激しく渦巻く。異様な赤いオーロラに照らされ、ダウンサンプリングされつつある彼女は、まったく異変に気づいていないように見える。それらはもしかすると、僕一人だけに見えるという幻覚なのかもしれない。いよいよ僕の頭もおかしくなったのだろう。

世界の終わりって、きつとこんな風なんだろうな、と思った。

彼女がバンドを辞める。

それは確かに僕にとって、一種の世界の終わりと同義だった。

世界が終わって僕が消える前に。

どうしてもやらなければならないことがある気がした。

やつてもきつと後悔するし、やらなくてもきつと後悔する。僕はそういうタイプの間だ。

でも、それなら。どっちに進んでもどうせ後悔するのだったら。

やって後悔したほうがいい。

荒れ狂うカラフルな光の渦が、初めて僕をそんな気分にした。

だって。

人生は、一度きりなのだから。

人生は、やり直<sup>リカバリ</sup>しができないのだから。

百歩譲ってやり直せると仮定したところで、やり直した僕はもはや今の僕ではないわけで、その人生を僕が知るすべはない。僕にはこの人生しかない。

人生は、どこまでも一意<sup>ユニーク</sup>で非代替<sup>ノンファンジブル</sup>なものだから。

リュックから五線譜の束を取り出した。

「あの、これ……」

何の脈絡もない話を開始する。

「まだ途中なんだけど、ずっとオリジナル、やりたくて」

声が震える。脳天がぐらぐらして、視界がぶれる。

やっぱり、めちゃくちゃ恥ずかしい。嫌われるかもしれない。僕は馬鹿だ。でも。

「……ごめん。勝手に当て書きした」

彼女の目が大きく見開かれる。ラベンダーがふわりと香る。

「こんなの渡されても困ると思うけど」

花嵐が激しさを増してゆく。

無数の菊が、牡丹が、柳が、彼女の背後で次々と咲き乱れる。

「餞別にできそうなもの、これくらいしかないから」

光と音と振動が世界を灼き尽くす。五感が飽和<sup>サチ</sup>する。譜面の束を差し出し、僕は彼女の目をじっと見据える。

「——読んで、ほしいんだ。君に」

感謝と、敬意と、少しの恋慕と、ただ幸せを願う気持ちと。



あるいは、いつかどこかで、ありえたかもしれない後悔と逡巡と覚悟と。

持てるすべてを込めたコード<sup>code</sup>を全力で彼女の前に突きつけて、僕はひとつの賭けに出る。

まるで僕の宣言に呼応するかにように、世界がぐらりと傾き始める。



意識が明瞭な輪郭を得て、ゆっくりと目を開けた。

すでに窓の外は明るいようだ。枕元のスマホに手を伸ばし、傾けて時計を確認する。

二〇二七年七月四日、日曜日。午前五時四二分。

目覚ましより早く目が覚めたことに、ベッドの中で少し驚く。こんなにすっきりした目覚めは何年ぶりだろう。いつもは鉛のように重いまぶたも頭も、今朝は別人のように軽やかだ。

まるで自分と世界がたった今、作り出されて動き出したかのような、生まれたてのまっさらな朝だ。世界五分钟前仮説かよ。

冴えた頭とは対照的に全身の筋肉には、心地よい疲れがまだ残っている。昨晩は群衆にもみくちゃにされながら宇治を随分歩いたし、急な雷雨にも見舞われて、なかなかの運動量だった。少しはしゃぎすぎたかもしれない。だけど、後悔はしていない。

だって、宇治川花火大会なんて。

絶対にないがしろにできない、人生の記念日なのだから。

二〇二四年、三年前の宇治川花火大会。そこで賭けに出た結果、今の僕らがある。

今でもはつきりと思い出せる。三年前のあの日、花火のクライマックスで、僕は実に不思議な幻覚を見た。花火と桜吹雪とオーロラが渦巻いていた、という話をする決まって彼女に「何その欲張りセットみたいなの」と大笑いされるし、自分でも欲張りセットすぎると思う。

誰だよ、あんな幻覚をコーディングしたの。

——何度も繰り返したその問いはブーメランとなって僕の脳天に突き刺さる。

僕だ。

幻覚というものは僕の脳が生み出しているわけだから、僕の頭が相当イカれていたんだ

ろう。あの日、僕は緊張と水分不足と酷暑で熱中症になり、幻覚を見た挙げ句に失神して救護ブースの世話になるという醜態をさらした。体が前に倒れる瞬間、舞い散る五線譜の向こうで、泣きそうな顔で何度も僕の名前を叫んでいた彼女の姿を今でもかすかに覚えている。

あの花火の数日後、彼女は北海道の実家に帰っていった。彼女の脱退はバンドにとっても痛手で、程なくしてバンド自体も解散したけど、オンラインでの緩い繋がりは続いている。僕が倒れたことでオリジナル曲の存在は全メンバーの知るところとなり、無数のダメ出しと怒濤のアレンジの結果、見違えるようなクオリティになった。翌年、全員が再集結しての音合わせで、僕はこっそり泣いた。その後も年に一度、宇治川花火大会の翌日曜日にセッションすることになっている。ちょっとした同窓会みたいなものだ。そして前の晩には、彼女と花火大会をそぞろ歩くのが恒例になっている。

そんなわけで昨晚のアルタラセンターのシフトは、盆休み返上プラス焼肉と引き換えに後輩に代わってもらった。増渕もいたはずだし、緊急着信は一切なかったようなので、無事に終わったんだろう。

久々に熟睡した分、見た夢も結構長かったような覚えがある。雨の中でひたすら叫んでいたような気がする。何の修行だよ。

ベッドからそつと抜けだして、寝室のカーテンの隙間から外を覗く。烏丸御池からすまおいけの九階の窓からは、中層階の建物群の向こうに北山きたやまや比叡ひえいの青い峰々がよく見える。昨晚の雨は上がっているようだ。風が強いのか、低い夏の雲がダイナミックに空を流れている。雲の隙間から朝の光が差すと、雨上がりの京都の街は一気に彩度を増して、眩しさが寝起きの僕の目を射た。

眼鏡を装着して、世界を高精細モードにする。雷雨に洗われた京都の大気は驚くほど澄んでいて、いつにも増して新世界が五分前に始まった感がある。ふと北東を見やると御所の向こう、鴨川の方角に、大きめの虹が架かっているのが見えた。

あれっ、と思った。

虹というものは必ず、太陽と反対側に出来る。夏の早朝のこの時間であれば、本来は西の方向に見えるはずだ。

誰だよ、ライティング、バグってるぞ。

もし本当に世界を五分前に作った奴がいたとしたら「ハロー・ワールド」から出直して来いと言いたいところだけど、じゃあお前はどうかんだよ、この手のポカミスをやったことないのか、ともう一人の自分がセルフツツコミを入れる。なぜか急に、駆け出しの頃にコーディングしたアルタラのリカバリプロセスが思い出される。やけに冴えた今朝の僕の頭は、当時気づいていなかった要改善点をいくつも洗い出してきて、脳内に警告マークをいくつもポップアップさせる。僕も少しは成長したということだろうか。

ううむ。ちよっとリカバリの全過程を総点検したほうがよいかもしれないな。何しろ僕らは、千古先生も含めて、実際にリカバリを本番環境で経験したことはないのだ。もっとも、一度も実行せずに済むのが理想ではあるのだけど。

再び窓の外に目をやると、もう虹は消えていた。いつもの京都の街並みが広がっている。虹に似た大気光学現象はいろいろあるから、その類のものだったのかもしれない。

そこまで考えて初めて、ようやく気がついた。

頭の中で、どこか懐かしいようなメロディが流れ続けている。

どうやら、目覚めたときからずっと無意識に口ずさんでいたみたいだ。いかにも僕が書きそうな、だけど身に覚えのないコード進行。何の曲だっけ。

——ああ、そうだ。夢の中で書いたコードだ。

雨に打たれながら、空に向かって掲げたコード譜だ。

……コード譜？ そうだったっけ？ ふと、そんな疑問が頭をもたげる。コードはコードでも、プログラムコードだろ。なぜか、どこかでそんな声がする。書き殴ったのはアルタラのネイティブコードだったような記憶も、かすかにある。

いや、違うな、と思い直す。きっと何かと混同しているのだろう。夢とはいえ、雨の中で空にアルタラのコードを掲げるってどんな状況だよ。

やっぱり、あれはコード譜だった気がしてきた。必死の思いで譜面を突き出した経験なら、実際、三年前にあるわけだし。

それに、僕の脳内で流れ続ける、まだ誰も知らない新しいこのコード自体が、きっと何よりの証拠だ。

夢の詳細はまったく覚えていない。

ただなんとなく。

あの時の気持ちを忘れてはいけない気がした。夢の中の僕は、どうしようもなく馬鹿で、自己中心的で、けどとても真摯な思いに突き動かされていたような気がした。

僕にしか書けない、世界を書き換えるコード。

うん。僕らの次の新曲には、この進行を使おう。素直にそう思った。

五線紙と鉛筆を手に取り、ベッドの端に静かに腰掛ける。

まっさらな譜面を広げると僕は、記憶から消えないうちに鉛筆を走らせ始めた。

(了)